

第五章

結論及び今後の課題

A. 結論

終助詞は文の終わりにあって、文を完結させ、同時に感動、禁止、疑問、反語、願望、強意などの意味を表す助詞である。自立やではなく、接合を持つことはできない。本研究では「よ」と「ね」を集中する。

終助詞「よ」と「ね」は、一つだけのファティック助詞と対等することはできない。同じ機能が違うコンテキストを持って、その使用するファティックも同じではない。たとえば、相手に賛成をもとめる「ね」はインドネシア語で「*ya*」または「*kan*」を使うことができる。ファティック助詞は「よ」と「ね」の対等として機能や意味を似ているが、絶対的な翻訳になることはではない。

インドネシア語に翻訳されたデータに基づき(大体『メゾン一刻1版』)、翻訳文が伝達されるように意図やニュアンスに準拠しているとき、「よ」と「ね」が翻訳されていない。文法的には

終助詞を翻訳することができなく、機能が似ているから大体、ファティック助詞に対等される。

インドネシア語のファティック助詞に不規則または間違った翻訳された「よ」と「ね」に関しては、最小限がある。問題はビット困惑せざるを得なっている翻訳に起こるが、文の実際の翻訳は正しいである。

分析された研究の資料に「よ」と「ね」の対等になるファティック助詞はいくつかある。けれども、同様の意味または機能を持つのは「ね」と「Ya」そして「よ」と「Lho」。ほかのファティック助詞は同様の意味がなくても同じコンテキスト使って同じ感覚を作成するように文を調整する。

終助詞	同様の主な機能
ファティック	
ね	両方で知られている情報について話し手から話し相手への確認や承認のための要求を示す最終的な終助詞である。
Ya	
よ	自分自身にしか知られているものに話し手の強い信念を示す最終的な終助詞である。
Lho	

終助詞の翻訳過程はセマンティック翻訳とコミュニケーション翻訳の方法を使用する可能性が高い。セマンティック翻訳に重点を置いては、翻訳に提示しなければならない用語、キーワード、または語句を使用することである。いっぽう、コミュニケーションの翻訳はターゲット言語にソース言語からのメッセージの配信を優先順位の翻訳方法である。コミュニケーションの翻訳は、テキストリーダーがソーステキストの読者と同じ反応を持つターゲットが期待されるリーダーに効果が優先されます。翻訳自体はターゲット言語の許容かつ合理的に形成するように指示されながら、この方法では、重要性は、メッセージの配信である。

B. 今後の課題

本研究では、「よ」と「ね」ファティック助詞とペアになってインドネシア語コースへのマッチングに特化であり、研究者は、次のようにいくつかの提案を与えることを試みた。

1. 日本語では終助詞がいっぱいあるので、次の研究に「よ」と「ね」以外ほかの終助詞の分析することが必要である。
2. 次の研究は対照的な研究がいいである。たとえば、さらなる研究が終助詞の間で対照的なファティック助詞、終助詞とイ

インドネシア語のファティック助詞に変換するか、このバイアスのテーマを研究するために日本語に翻訳されている必要とされる多くの開発されている。

